別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　牧野陽子

牧野陽子氏の「＜時＞をつなぐ言葉―ラフカディオ・ハーンの再話文学」は、ラフカディオ・ハーン（帰化名小泉八雲）による、おもに来日後の作品をとりあげ、これにおのおのの作品自体が要請する読みにしたがって、精緻なエクスプリカシオン・ド・テクスト（explication de texte）を施し、ハーンの作品の文学としての魅力を語った論文である。牧野氏には、参考論文として提出された評伝『ラフカディオ・ハーン―異文化体験の果てに』（中公新書）があるが、本論文は、ハーンの来日後の足跡に目配りしつつ、あくまで作品そのものを読み解こうとする姿勢において一貫する。本論文においては、ハーンの来日後の作品が網羅的に論じられているわけではないが、扱われている作品とテーマは、ハーンの文学世界の特色のいくつかを鋭く抉り出すことに成功しており、今後のハーン研究の方向に強い示唆を与えるものと考えられる。

本論文は、全九章の本文および「はじめに」と「結び」からなる。以下、論文の構成にしたがって、内容の概略を記す。

「はじめに」において牧野氏は、ハーンが晩年に書いた怪談の魅力が、人間にとっての根源的な感覚、とくに記憶と時間の感覚に関わっていることを指摘する。過去に遡る人々の記憶につながる物語が「再話」として語られるハーンの作品を、「再話」という視点から論じようとする本論文のアプローチがここに定められる。考察の課題となるのは、原話が再話としていかに変容し、再話文学という文学的な営みがどのような意味を持ったか、それがハーンの日本理解にどう関わったか、という点を明らかにすることである。

ハーンは、一八九〇年に来日した。つづく第一章は、ハーンの来日初期の作品「東洋の土を踏んだ日」「盆踊り」を取りあげ、これを一八七七年に来日したエドワード・モースの日記『日本その日その日』の記述と比較することで、ハーンの作品に描かれる経験の特質を取りだす。それは現実の向こう側に、ある奥深いもの、内なるものを見いだそうとする態度であり、ハーンの日本体験と、これによって生み出される作品群を予見し、暗示するものとなっているとされる。

第二章は、民話や伝説に対するハーンの関心が来日以前から見られることを、ハーンが一八八七年から二年間滞在した、西インド諸島の仏領マルティニーク島での経験において確認し、ハーンがマルティニークを舞台に描いた小説『ユーマ』の新たな読みにつなげてゆく。牧野氏によれば、『ユーマ』に描かれる民話を語る黒人の乳母は「異文化を語る養母」として捉えることが可能であり、異文化としての日本と西洋が混交するハーンの再話文学を準備するものと位置づけられる。

第三章は「むじな」「因果話」をとりあげて、『百物語』に取材するハーンの語りが「採話」ではなく、ハーン自身の内面を写し出す「再話」となっていることを、原話との比較作業において明らかにする。そこでは「顔」や「背中」の恐怖が、人間の根源的な恐怖と

業の感覚と深く結びついていることが指摘される。

第四章は「茶碗」を分身の物語として読む。牧野氏は、欧米の様々な分身物語を参照しつつ、「茶碗」が意図的に未完の物語の枠組みをとりこみつつ、過去の記憶を分身として捉えた物語となっているとする。

第五章では「雪女」におけるボードレールの散文詩「月の贈り物」の影響がまず指摘され、「白い女」と「宿命の女」の文学的系譜が、「雪女」の作品世界の成立を促していることが論じられる。

第六章は「耳なし芳一」をオルフェウス物語の一つの変奏として読む。平家一門の物語を語って亡霊たちに感銘を与える琵琶法師の姿には、再話という行為の芸術性に関するハーンの自負が読み取れるとされる。

第七章は、「青柳物語」が人間と樹木が歌心を通じて結びあわされる物語であり、「十六桜」が人間と樹木とが再生を通じて結びつく物語であることをふまえ、樹木をめぐるハーンの心的原風景と、日本の自然観に価値を見いだす感受性のあり方が指摘される。

第八章は、熊本時代の随想「夏の日の夢」が浦島物語を再話していることに着目し、そこにハーン自身の感性がいかに表現されているかを論じる。ハーンは、チェンバレンの『日本の古典詩歌』に収められた英訳の浦島物語に依拠しているが、英訳にあらわれる詩人たる「私」の視点とその語りが、ハーンの浦島物語の再話には反響しており、海に向かう詩人のまなざしも共有されているとされる。こうして、「夏の日の夢」は、再話することを通じて過去や異界と往還するハーン自身の姿を描き出すものであることが主張される。

最終第九章は、「安藝之介の夢」を手がかりに、異世界への憧憬を語ったハーンの再話文学の性格を確認し、「結び」は、ハーンの再話文学が過去への問いに導かれ、過去の物語や異世界の時間を今につなぐものであることを確認している。

いずれの章においても、ハーンのテクストの読解にあたっては的確な文学作品等が参照されており、その記述は牧野氏の豊かな教養と学識を裏書きしている。

以上のように要約される本論文に対して、審査委員からは、「翻案」とは区別される「再話」という用語の定義をさらに精密にすべきではないか、分身物語や「宿命の女」の文学的系譜に関しては、より明確な文学史的記述が必要ではなかったか、等の指摘があった。また、異文化に身を置いたハーンの仕事をハーン自身はどう位置づけていたのか、「再話」が持つ文学的価値は世界文学史の文脈においてどのように評価されうるのかといった、より広い視野の問いにも答えて欲しいとの希望が出された。さらには、ハーンの再話が日本の読者に広く受け入れられ定着した理由、背景についての質問もなされた。これらはいずれも本論文によって喚起される学問的関心によって導かれるのであり、本論文がラフカディオ・ハーン研究への重要な貢献をなしていることの証左でもあることが、審査委員のあいだで確認された。

よって本審査委員会は、牧野陽子氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。